

# スライド式七曜早見盤

佐藤明達

Perpetual Calendar made of Sliding Boards

Satô Akisato

abstract

I have presented a rotating perpetual calendar dial in 1997. Now I shall show a sliding perpetual calendar board, more alike to the usual calendars, and a re-use calendar board, indicating the name of it's month clearly.

## 1.はじめに

筆者はかつて回転式の七曜早見盤を紹介した<sup>1)</sup>が、日常使用するカレンダーはすべて矩形であるから、見る人に違和感のないスライド式七曜早見盤を作ってみた。原理は文献1で述べたから、ここでは一例を挙げて作り方を説明しよう。

## 2.作り方

図1は月と日を記した日付け盤で、私は菓子箱の厚紙を利用した。窓はカッターで切り抜く。寸法はmmで示した。図2は年と曜日を記した曜日盤である。年数は例えば06は2006年を意味する。丸で囲ったのは閏年である。使用期間はここでは2006年から2027年までの22年間とした。閏年は平年の次ではなく一つ跳ばして記入してあることに注意されたい。図3の間盤は図2より厚い紙かもしくは同じものを二枚重ねて貼る。図1と同じ大きさの厚紙の上下に間盤を貼り、その上に日付け盤を貼る。間に挿入した曜日盤が左右に滑らかに動くかどうか確かめる。裏面中央下端に図4の背盤を貼る。本を上にも数冊重ねて置き数時間放置する。糊が乾いたら取り出し、背盤を点線で折り曲げて早見盤を机の上に立てる。

## 3.使い方

例えば2006年12月のカレンダーを知りたいければ、曜日盤の06年を日付け盤の12月に合わせる。12月23日の天皇誕生日は土曜日で、翌24日と連休になることが分かる。

ただし閏年の1月、2月に限り、丸で囲った①月、②月に合わせる。例えば閏年の2008年の2月28日は木曜日となる。

曜日盤の年表示を書き替えれば、過去・未来に使用期間を延長することができる。

## 4.再用カレンダー

毎月末、翌月の数字に合わせる(adjust)べきであるが、うっかり忘れると月が変わったのを知らずにいて、曜日を間違えてしまう。そこで月名を明示した再用(re-use)カレンダーを作った(図5)。日付けの上に月名の出る窓を明けてある。月名を記した月盤は表に3月から8月まで(春・夏)、裏に9月から2月まで(秋・冬)の月名が書いてある。下部には無地の大小月盤を付けた。29、30、31日の数字は、ここに明けた窓の中に書いてある。平年の2月にはこの盤を左端まで差し込み、閏年の2月には30、31を盤で隠す。小の月には31だけを隠す。

再用カレンダーには年の表示がないから、七曜早見盤でその月の曜日を求め、それに合わせる。図5は2006年10月のカレンダーを表わす。年の表示がない代わりに、こ

のカレンダーは曜日盤の長さが短くてすむ利点がある。これにも背盤を貼り、机の上に立てておく。

#### 5. おわりに

この早見盤は紙のムダを大幅に減らせる。しかも原理が簡単で費用もかからない。天文工作教材(papercraft)として教育的にも優れている。何より実用的で、天文に関心のない人にも感心してもらえるだろう。より便利なものを工夫する余地もある。制作コンクールを開催すると好評を得ると思う。

#### [参考文献]

- 1) 佐藤明達、1997、七曜早見盤の作り方 「第11回天文教育研究会年会集録」pp.41～45

### 楽しい学習の末路

新指導要領では、知識・技術の習得よりも、興味・関心・意欲を重視しようという方針がとられています。とにかく楽しく学ばせることを最優先し、それによって、生涯にわたって学んでいく意欲を継続させよう、というわけです。(中略)

しかし、その結果として、高等学校に進学してくる生徒たちはどうなったかと申しますと、まず、基礎的な知識・技術(たとえば、数学の計算力、日本語・英語の語彙など)が著しく低下しました。さらに、基礎の裏づけがないために、思考力も発想力も貧弱になり、興味も非常に浅薄になってしまいました。

たとえば、生徒に実験をさせても、「色が変わった」、「大きな音がした」というレベルで喜ぶだけで、どんな仕組みになっているのだろう、というような「突っ込んだ」興味をもつ生徒は、従来よりもずっと減りました。何よりも、じっくりと考える忍耐力が育てられていないので、飽きてしまうと、すぐに投げ出してしまおう生徒が大多数です。(岡部恒治他編「分数ができない大学生」東洋経済新報社1999 pp.141～2)

### 星と花

同じ「自然」のおん母の  
御手にそだちし姉と妹  
み空の花を星といい  
わが世の星を花という。

かれとこれとに隔たれど  
においは同じ星と花  
笑みと光を宵々に  
替わすもやさし花と星。

されば曙雲白く  
御空の花のしぼむとき  
見よ白露のひとしづく  
わが世の星に涙あり。

(土井晩翠著「天地有情」より)

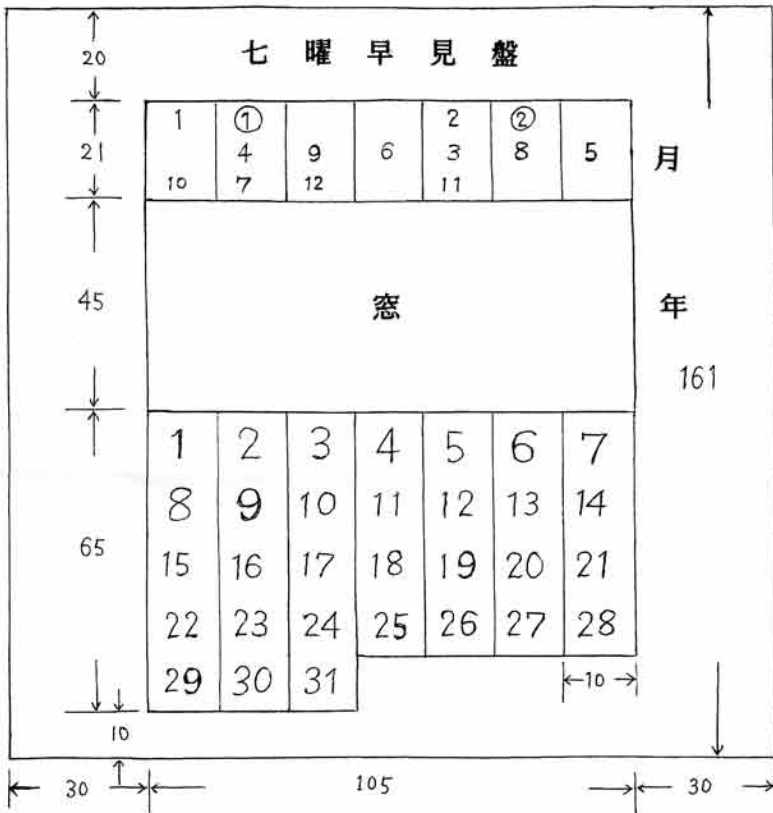


図 1 日付け盤

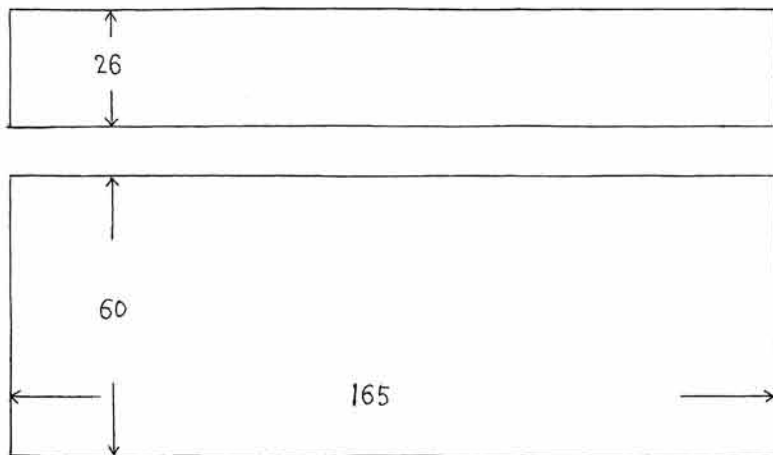


図 3 間盤

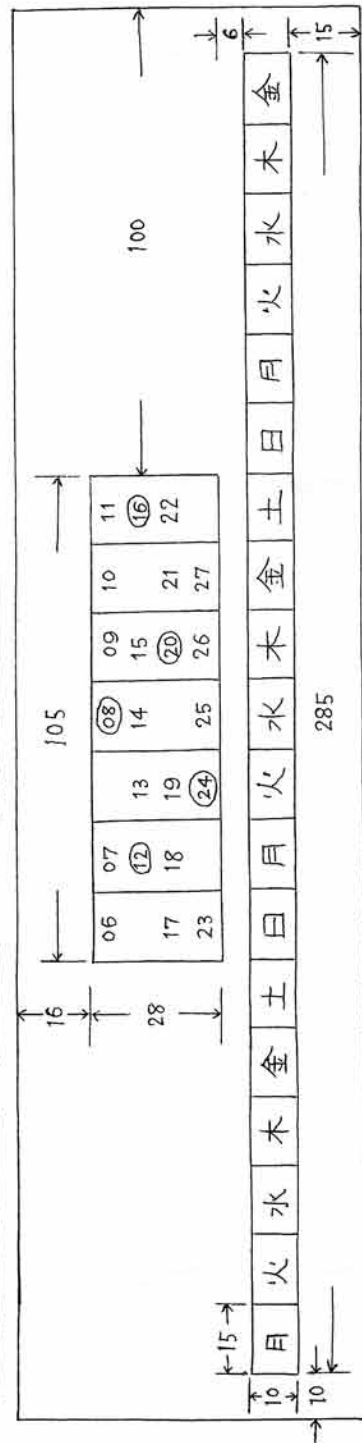


図 2 曜日盤

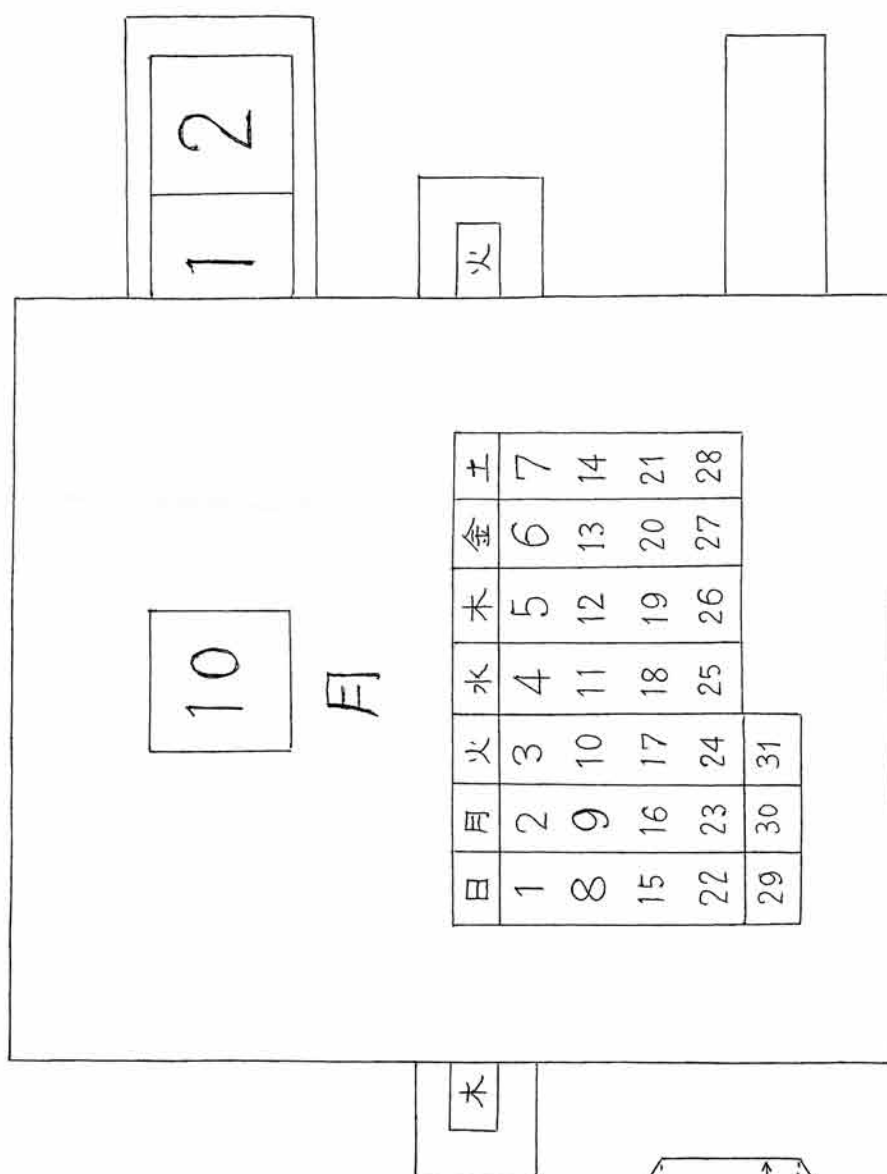


図 5 再用カレンダー

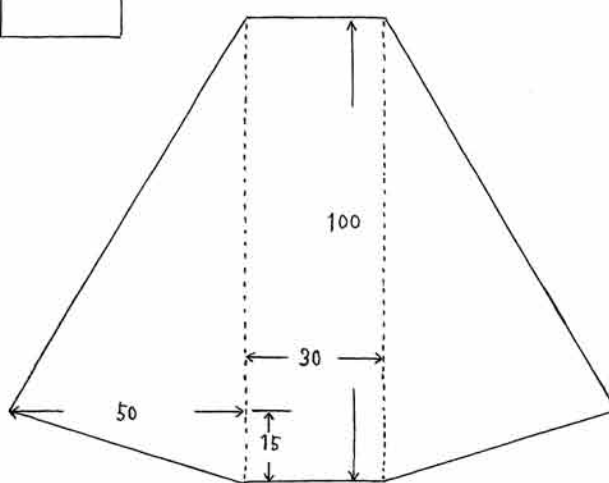


図 4 背盤